

派遣者番号	R3J03	氏名	小野寺 亜希子
研究主題 －副主題－	ICT を活用した高校国語科における読書にひらく「読むこと」の指導研究 －SAMR モデルにもとづく SNS 世代の「打ち言葉」に着目した実践開発－		
派遣先大学	筑波大学 大学院	指導担当者	長田 友紀
所属	都立八王子東高等学校	所属長	宮本 久也

キーワード： ICT 読むこと SAMR モデル 打ち言葉

要旨： 生徒の生活の中の「読むこと」を考えてみると、その中心はインターネットを介した言葉のやりとりにますます比重が置かれ、授業においても電子メディアを介して生徒の主体的・協働的な学びがより身近になった。本研究では研究の所在を、ICT を活用する際の「情報」の更なる活用と、「言葉」の指導の検討の必要性として、研究の目的を(1)国語科における ICT を活用した指導の課題を「情報の活用」と「言葉」に着目して明らかにすること、(2)「今後の国語科における ICT を活用した指導の在り方」について実践的な指導内容を構想することとして調査及び研究実践を行った。研究では、まず先行研究により情報と言葉に関して課題を見出した後、これを踏まえて「SAMR モデル」に基づく授業の構想モデルを開発し、実践研究を実施した上でその学習効果を検証した。

1. 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、国語科における ICT を活用した指導の課題を「情報の活用」と「言葉」に着目し明らかにした上で今後の国語科における ICT を活用した指導の在り方について実践的な指導内容を構想しその効果を検証することである。

生徒の生活の中の「読むこと」の中心はインターネット（以下「ネット」）を介した言葉のやりとりになります。比重が置かれつつある。授業においても GIGA スクール構想により、一人一台の情報端末が整備され、ネットやスマートフォンといった電子メディアを介して生徒の主体的・協働的な学びがより身近になった。三宅・益川(2014)は ICT を活用した指導の利点について以下のように述べている。

ICT は教室を飛びこえ社会に目を向けさせ、『違い』の発見を促す。そして自分が正しいと感じているものとは違う視点が意識されることによって知識は「広がり」をもつ。その経験が「考え」の適用抽象度を上げ、適用範囲を広げる。

この点に関して高校国語科としては新たな授業構想の開発が求められる。そこで注目したのが SAMR モデルの考え方である。SAMR モデルとは、Ruben. R. Putendura (2014) により一般化された、授業でテクノロジーを使ってデジタルな学習環境を作るモデルである。一方で、国語科として ICT を利用するにあたっては「言葉」の指導に関しても、教育的アプローチの検討が必要である。ICT を活用するとき生徒の思考はいわゆる「打ち言葉」で表現される。田中(2014)によると「打ち言葉」とは「インターネットを介したコミュニケーションにおいて、キーボードなどを「打つ」ことにより視覚化されたことばのことを指す」。これまでの国語科指導において「打ち言葉」の特徴を捉えた上での指導は十分とはいえず、これに関して手立てを講じる必要がある。

2. 研究の方法

(1)「情報の活用」と「言葉」に関する指導の課題

先行研究の整理、教科用図書調査、質問紙調査を通して、ICT を活用した指導の成果と課題を「情報の活用」と「言葉」に着目して整理した。質問紙調査は令和 3 年 2 月下旬～3 月上旬に都立中等教育学校の高校 1 年生 140 名、高校 2 年生 130 名(計 270 名)を対象に実施した。

(2)実践研究

(1)で論じた課題をふまえて授業モデルを開発し、都立高等学校第 1 学年 2 学級(75 名)を対象に実践研究を行った。その後実践研究の効果に

関して SAMR モデルの観点から検証した。調査時期は令和 4 年 6 月上旬と 9 月上旬である。

3. 研究の結果

(1)「情報の活用」と「言葉」に関する指導の課題

まず「情報の活用」については、SAMR モデルの「M(変容)」を企図した学習環境の整備を課題として挙げた。教科用図書調査によれば、これまでの ICT を活用した国語科での指導は、SAMR モデルの観点から点検すると「S(代替)」から「A(拡張)」段階であり、「M(変容)」段階を実現させることが今後求められる。さらに国内外の SAMR モデルに関する先行研究を整理し「M(変容)」段階を成立させる要素を「接続化」「個人化」「協働」と定位した。

「SAMR モデル」について補足する。このモデルは四つの段階から構成される(図 1)。野中(2019)によると、テクノロジーを使った学習環境は Substitution(代替)「これまで行われてきた教育を、新しく出現した別のテクノロジーを使って実現するという段階」にある。Augmentation(拡張)は「単なる代替にとどまらず、教育機能が改善され、テクノロジーを使うことによって教育機能が改善される段階」である。Modification(変容)、Redefinition(再定義)は、前の二つの段階に対して従来とは異なる次元に教育を進める。野中(2019)は Modification(変容)の段階を「テクノロジーを使うことによって『教える/学ぶ』関係が変容する段階」と説明している。本研究では、「M(変容)」段階を企図した授業を構想した。

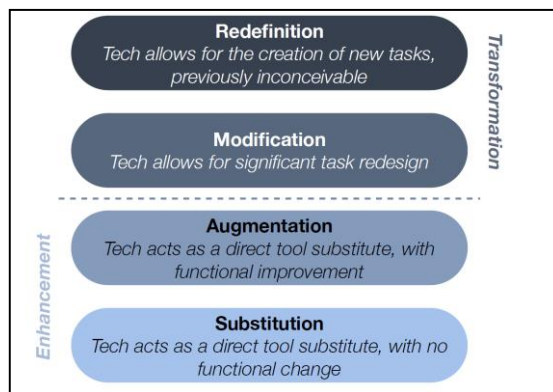


図 1 SAMR モデル (出典: Putendura(2014)による)

次に「言葉」については、先行研究と質問紙調査により、メディアと言葉の関係を考えさせるための「打ち言葉」に関する授業開発を今後の課題として挙げた。質問紙調査の結果、石黒(2020)が述べた「打ち言葉」としてのメンタリティ(「情報面の欠如」「感情面の欠如」)が認められた。この「情報面の欠如」に対して、高校生

は様々な方策をとっていることも調査により明らかになった(表1)。

表1 石黒(2020)と比較した「高校生」の特徴

	書き言葉	話し言葉	打ち言葉 (石黒(2020))	高校生※の打ち言葉
媒介手段	文字	音声	文字	文字
時間	長い	短い	短い	短い
やりとり の回数	一回・一 方通行	数回・往 復	数回・往復	数回・往復
文・発話 の長さ	簡潔	冗長	短く、断片的	「話す」意識をもつが、 冗長ではない。短く、断片的。 例:句点よりも読点を使う
完全性の 追求	完全を求 める	完全を求 めない	※1 (情報面の欠如)	完全を求めないが、 情報面の欠如への方策もする。 例:見直し、漢字誤用への注意
コミュニ ケーション 成立の 方策	送り手が より完全 な言葉を用いて、 相手に伝えようとする	送り手と 受け手が 協力して 成立させる	※2 (感情面の欠如)	「送り手/受け手の協力」という意識は個人に委ねられる。 →感情面の欠如に「戸惑い」 例:「!」の有り無しに一喜一憂、 相手の感情が読み取れないことに不安を覚える。

※「高校生」とは、本調査の対象者(都立中等教育学校の高校生270名)を指す。

(2)実践研究

(1)で明らかにした課題を踏まえ授業モデル(図2)を開発し、都立高等学校第1学年2学級(75名)を対象に実践研究を行った。

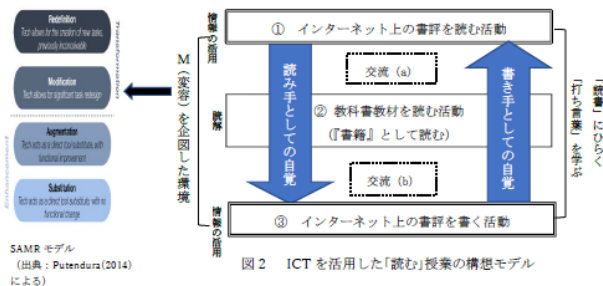
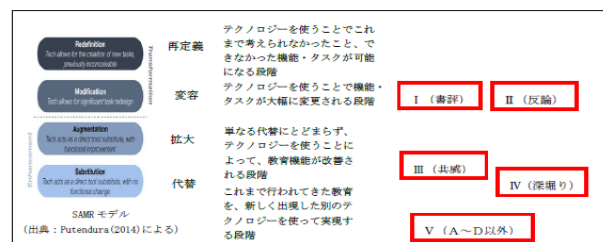


図2①「ネット上の書評を読む活動」において生徒にネット書評に対する自分の評価をワークシートに記入させた。筆者はそれらを五つの群(「I分析」「II反論」「III共感」「IV深掘り」「V I~IV以外」)に分類した。

次に生徒の反応を SAMR モデルから検証した。SAMR モデルの「M(変容)」を企図した本実践に対して生徒は4通りの反応を示した(図3)。「I分析」・「II反論」群は M(変容)、「III共感」群は S(代替)~A(拡張)、「IV深掘り」群は S(代替)段階の環境に合致する。「V(I~IV以外)」群は S(代替)に合致しない反応を見せた。



4. 研究の考察

本研究の成果として2点を挙げる。

第一に、生徒のネット使用に関わる「言葉」の感覚を調査し課題を明確にした上で「言葉」を学ぶ授業を開発・実践したことである。構想モデルは生徒にとって「打ち言葉」について考え、「言葉」に自覚的に向き合うために有用な授業であることを明らかにすることができた。

第二に、高校国語科において SAMR モデルに基づいて「M(変容)」を企図した授業を構想・実践し、生徒の反応を検証したことである。これまで高校国語科において SAMR モデルに基づき授業を成立させる要素を定位し授業を構想・実践した研究は管見の限り無い。本研究では SAMR モデルの「M(変容)」段階を成立させるためには「接続化」「個人化」「協働」の3要素が揃う活動の必要を見出し、これを踏まえて授業を開発・実践した。実践を通して生徒の反応は約半数が「M(変容)」段階に相当する反応を示した。一方で約半数は他の反応を示したことから、環境整備に対して生徒は複数の反応を示すことが明らかになった。

本研究の課題として「M(変容)」段階を企図した際、恒常的に複数の生徒の反応群が現れることを追試により確認する必要性を挙げる。

しかしながら本研究によって高等学校国語科において新たな概念を用いた実践から今後の ICT を活用した授業を提案することができた。今後の授業において SAMR モデルに基づく更なる実証を続けることで、生徒の主体的な学びを支えていきたい。

引用文献

- 石黒圭(2020)『リモートワークの日本語ー最新オンライン仕事術』小学館, pp6-9
- 田中ゆかり(2014)「ヴァーチャル方言の3用法「打ちことば」を例として」石黒圭・橋本行洋(2014)『ひつじ研究叢書(言語編)第122巻 話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp. 37-38
- 野中潤(2019)『学びの質を高める! ICT で変える国語授業ー基礎スキル&活用ガイドブック』明治図書出版, pp. 4-5
- 三宅なほみ・益川弘如(2014)「インターネットを活用した協調学習の未来へ向けて」『児童心理学の進歩 2014年版 53巻』金子書房, pp. 189-213
- Ruben R. Puentedura, (2014) Learning, Technology and the SAMR Model:Goals,Processes and Practice <http://hippasus.com/blog/archives/127> (2022, 02, 17 閲覧)